

平成 30 年 8 月 31 日現在

機関番号：32619

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26420649

研究課題名(和文) 片山東熊と神宮徴古館・農業館の建築に関する基礎的研究

研究課題名(英文) basic research for Tokuma Katayama and buildings of Jingu Choko Kan and Jingu Nogyo Kan

研究代表者

伊藤 洋子(渡辺洋子) (ITO (WATANABE), YOKO)

芝浦工業大学・建築学部・教授

研究者番号：40327755

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は神宮徴古館・農業館所蔵資料を調査し、神苑会の業績と倉田山建築群の変遷を追うものである。特に片山東熊との関係を中心とする。所蔵資料の中に「東熊」の押印のある青焼き図面が4枚あり、金具利用に関する図面および中央広間に関する図面であったことで、東熊がそれらに関与した可能性が高いと考える。明治38年の棟札には片山の名前がないが、これらの資料により少なくとも部分的に関与したことは確実である。

徴古館は伊東忠太らによる木造徴古館の他、東熊による耐火建築の徴古館も複数の意匠があり、3回設計変更されたと推定される。また天窓でなく側窓採光のため、竣工後の書画展示には家具配置による工夫があったと考えられる。

研究成果の概要(英文)：Tokuma Katayama was one of the leading architects of the Japanese modernization period, for the Meiji Palace and other Imperial residences and museums. He also designed Jingu Choko-kan and Jingu Nogyo-kan in Ise City, Mie prefecture. The museums were at Kuratayama by the Shin'en Board (Shin'en-kai). This research focuses on the architecture and construction processes of these two museums, by means of analyses of historical documents and drawings investigated on-site. The main conclusions are as follows:

(1) On some blueprints for Jingu Nogyo-kan, the seal of Tokuma was discovered. This shows he contributed to the structural integrity and the shape of the central hall. (2) The design of Jingu Choko-kan was changed three times, and the plan for a fireproof building by Tokuma was finally selected in comparison to the wooden construction ones before it. To compensate for issues concerning lighting, careful considerations was put into the placement of painting and calligraphic works.

研究分野：建築史

キーワード：片山東熊 神宮徴古館 神宮農業館

1. 研究開始当初の背景

嘉永6年旧暦12月20日に長州藩萩の今古萩町で下級武士の四男として生まれた東熊は、明治元年の戊辰戦争で山県有朋(1832-1922)率いる討幕軍に加わり、その後、同5年(1872)に起きた山城屋事件で汚職事件の疑いをかけられた山県を東熊の長兄が救ったことにより、のちに山県の庇護を獲得、宮廷建築家としての地位を得ることになったとされている。

東熊は、明治6年8月に初めて生徒募集を行った工学寮に官費生として入学、同10年に工学寮は工部大学校となり、当時、造家学科教授であったコンドル(1852-1920)の下で建築を学んだ。明治12年、最初の卒業生として辰野金吾、曾禰達蔵、佐立七次郎とともに卒業した後、工部省に入り、営繕局7等技手として建築家の道が始まった。工部省が国の営繕事業を管轄し始める明治7年から廃省になる18年までの12年間、洋風建築の導入・発展において大きな役割を担い、やがて日本の建築界を引率する存在となっていく。

片山東熊とその作品については、小野木重勝「日本の建築[明治大正昭和]2様式の礎」(三省堂、1979)、同「明治洋館宮廷建築」(相模書房、1983)、堀越三郎「明治初期の洋風建築」(丸善株式会社出版、1973)、日本建築学会編「日本近代建築総覧」(1980)、藤森照信「日本の近代建築〈上 幕末・明治篇〉」(岩波新書 308、1993)、塩田昌弘「片山東熊とその時代」(大手前大学社会文化学部論集 4、2003)、鈴木博之監修「皇室建築-内匠寮の人と作品」(建築画報社、2006)、小沢朝江「明治の皇室建築-国家が求めた〈和風〉像」(吉川弘文館社、2008)などの研究があり、また作品を収録する図集・写真集も多々あり、枚挙にいとまがない。

しかし片山に関する私的な資料は散在しているときれ、遺品についても殆ど知られることは無かった。研究代表者が本研究に先立ち平成22年より25年度まで実施した同家の史料研究では、ハガキ238枚、図面5枚、写真25枚、サンプル帳24点、スケッチ2枚、写真帖6冊、そして辞令128通ほかの遺品を調査することができた。

その研究中、2011年11月17日、東熊の作品を追う過程で神宮徴古館・農業館にて実測調査を実施した際、同館に所蔵される複数の図面を閲覧することができ、思いがけず「東熊」押印のある農業館の青焼図面4点を発見した。農業館は『三重県近代和風建築総合調査報告』(三重県教育委員会 2008年)に「片山東熊の設計であるとされるが、その確証なし」と発表されたあとでもあり、当該図面・史料の価値を強く認識し、正確に全貌を把握する必要を痛感した。

2. 研究の目的

神宮徴古館・農業館は、三重県伊勢市に所在する。徴古館は神宮に関連する様々な歴史的資料の展示、収集を目的とした博物館であり、片山東熊と高山幸次郎の設計により、明治42年5月に倉田山丘陵に建築された。農業館は我が国の農業を主体とした様々な展示・収蔵する博物館として明治24年に外宮神苑前に創建されたが、明治37年現在の倉田山の地へ移転することとなり、それに際して、創建時建物の移築とともに増築し、中庭回廊形式の建物として翌38年に完成した。いずれも創建は明治19年に設立された財団法人「神苑会」による。両建物は平成10年に登録有形文化財に登録されている。また片山家史料中に神苑会会頭・副会頭から送られた左の会員証賞(明治23年11月24日付)があり、東熊の神苑会との関係がわかる。

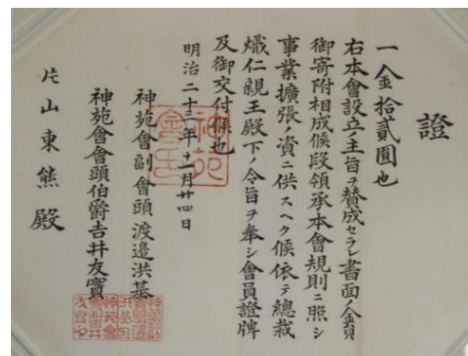


図1 神苑会証賞 (片山家史料)

表1 本研究に使用する資料について

番号	No.	項目	数量
神宮徴古館・農業館所蔵	1	神宮農業館の資料	53枚
	2	神宮徴古館の資料	156枚
	3	神宮徴古館及び神宮農業館共通の資料	27枚
	4	その他の資料	30枚
木子文庫所蔵	1	神宮文庫計画案透視図写真	1枚
	2	伊勢神宮司庁写真	1枚
	3	伊勢神宮両宮徴下御物陳列場写真	1枚
	4	神宮司庁図面	4枚
	5	御物陳列場図面	2枚
神宮文庫所蔵	1	神苑図誌	1冊
	2	神苑会関係資料	3冊
	3	農業館写真	1枚

表2 神宮徴古館・農業館所蔵史料リスト（農業館関連）

- 1 神宮農業館電灯配線図(青焼) 1
 - 2 神宮農業館平面図 2
 - 3 農業館ヤンマー館平面図 1
 - 4 農業館屋根伏図修繕カ所の記入有(青焼) 1
 - 5 農業館外部腰回りペンキ塗替箇所指定図(青焼) 2
 - 6 農業館建築工事行程表 1
 - 7 農業館事務所敷地々均し断面之図 1
 - 8 農業館事務所敷地々均し平面之図 1
 - 9 農業館図面壺～拾壺(式は現存せず) 10
 - 10 農業館正面建中央棟 1
 - 11 農業館屋根伏図(青焼) 1
 - 12 農業館小屋組軒図(青焼) 1
 - 13 農業館小屋組軒之図(青焼) 1
 - 14 農業館正面・側面(青焼) 2
 - 15 農業館増築断面図 1
 - 16 農業館側面及中坪戸口外面図(青焼) 1
 - 17 農業館側面及中坪戸口裁面図(青焼) 1
 - 18 農業館中央広間正面図(青焼) 1
 - 19 農業館中央広間平面図(青焼) 2
 - 20 農業館中央広間裁図(青焼) 1
 - 21 農業館平面図(青焼) 2
- 図中の東熊印→**
- 22 農業館裁面(青焼) 1
 - 23 農業館後部陳列室小屋組(青焼) 1
 - 24 農業館左右昇降室小屋組(青焼) 1
 - 25 農業館小家梁配置図(青焼) 1
 - 26 農業館床伏図(青焼) 1
 - 27 農業館正面中央昇降室小屋組(青焼) 1
 - 28 農業館其二外面《正面中央昇降室前面上部壁》(青焼) 1
 - 29 農業館陳列ケース配置図 1
 - 30 農業館陳列品証明工事引込線工事配線図(青焼) 1
 - 31 農業館展示仕様書 1
 - 32 農業館之図 1
 - 33 農業館敷地図面 1
 - 34 農業館平面図 1
 - 35 農業館平面図ヤンマー館の記入有 1
 - 36 農業館平面図照明ケース取付消化器設置場所 1
 - 37 農業館平面図青写真 1
 - 38 農業館平面図柱間尺度等詳細 1
 - 39 農業館別館一階二階平面図旧徹下御物陳列所 1



神宮徴古館・農業館所蔵史料の内容は、表1に示すように神宮農業館の資料 53 枚、神宮徴古館の資料 156 枚、神宮徴古館及び神宮農業館共通の資料 27 枚、その他の資料 30 枚からなる。そのうち農業館関連の史料リスト(53枚)を表2に示す。

本研究の目的は片山東熊と神苑会および徴古館・農業館の建築を中心とし、史料を確実に把握した上で、下記諸点を明らかにすることである。(閲覧の許可は神宮司庁から受ける)

1. 片山東熊が神宮徴古館・農業館の建築設計に対し、注力した内容の把握。東熊作品、博物館建築史における位置づけを明確化
2. 神宮徴古館・農業館建築の変遷を明確化、特に木子清敬・伊東忠太による木造徴古館設計案との関連
3. 神宮徴古館・農業館以外の神苑会の業績をまとめる
4. 神苑会に関与した人物を明確化し、東熊との関係を分析。片山家史料に登場する人間関係との照合

3. 研究の方法

(1)本研究はまず神宮徴古館・農業館所蔵の諸図面・史料を実測・写真撮影によって正確にリスト化し、各々解題することを第一の基本とする。

(2)片山東熊設計の徴古館・農業館の図面を中心としつつ、配置図やその他、神苑会関係の建築および都市計画に関連した図面・史料を内容立てて整理・分析する。

4. 研究成果

上記目的に対応する各項目を以下に記述する。

(1) 神宮徴古館・農業館の建築設計と東熊特に片山東熊が神宮農業館の建築設計に対し、注力した内容

神苑会は明治 19 年(1886)に設立した私立団体で、有栖川宮熾仁親王を総裁とする。神苑会の業績を記述した「神苑会史料」には、「神苑会事業着手順序予定」が記述されており、それによると第一に内外宮神苑地の整備を行う、第二に倉田山に神苑地を設け、歴史博物館を建設することが主な目的として挙げられている。その事業を達成すると、神宮司庁に神宮徴古館・農業館を献納し、明治 44 年に解散した。設立した人物は太田小三郎等、三重県の実業家が設立した。

神宮農業館は外宮神苑地に沿った豊川町に明治 24 年に竣工するが、その後倉田山に移築が決まり、明治 38 年に新しい建築として竣工した。

所蔵資料の中に「農業館平面図」「農業館正面・側面」「農業館中央広間正面之図」「屋根粗梁・ボルト棟鉄物之図 軒合掌鉄物之図」の 4 枚の図面があり、それぞれ「東熊」印がある。金物は建築全体に使用され、構造に配慮したことがわかる。またそれ以外の 3 枚の図面は中央広間に関するものであり、中央広間に関しても東熊が関与した可能性が高い。一方、「三重県近代和風建築総合調査報告」によると明治 38 年の棟札には片山の名前がないとされ、上記図面も全体の一部であることから、部分的に関与したと推察される。なお大正 4 年刊の「神宮綜覧」では片山工学士の設計であると記述がある。

(2) 神宮徴古館建築の変遷を明確化、特に木子清敬・伊東忠太による木造徴古館設計案との関連

神苑会では明治 22 年まで、伊勢神宮少宮司である浦田長民を仮会頭とし三重県に関連のある人物が神苑会を運営するが、同 22 年に東京事務所が設立されると、これを境に土方久元・佐野常民・渋沢栄一等、国に従事する人物が神苑会に所属し、東京事務所に計画の決定権が移る。そのため国家的な要素を多く含む神苑会に変わる。なおこの時、徴古館では「歴史博物館」から「徴古館」へと名称が変更された。

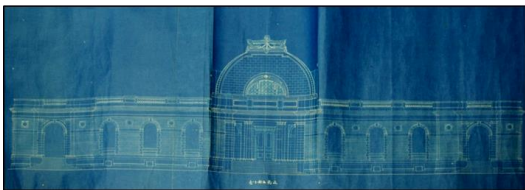
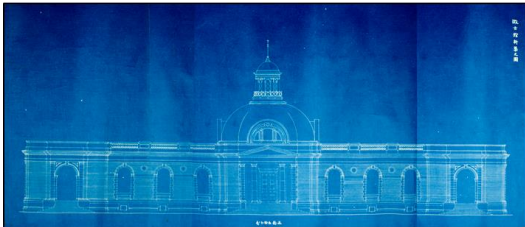
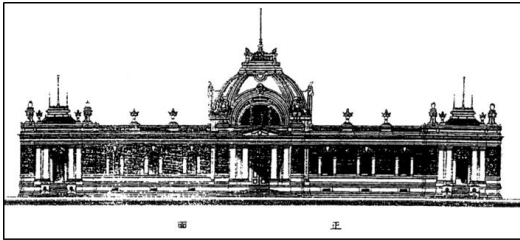
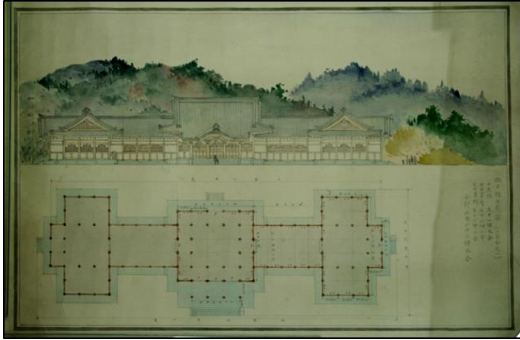


図2 徴古館図面の変遷

- 一番上 木造徴古館（伊東・木子）
- 二番目 明治 31 年頃～明治 38 年以前
- 三番目 明治 38 年～明治 40 年以前
- 四番目 明治 40 年～明治 42 年

建設地は神苑会設立当初から倉田山神苑地に計画していたが、同 28 年に農業館建設地である外宮前神苑地に計画が変更される。同 31 年に片山東熊に耐火構造を目的として徴古館設計を嘱託する。

同 30 年 5 月の建築雑誌に神宮徴古館に関する記述があり神道式の建築で建築するこ

と、外宮前神苑地に建設することが挙げられているため、この当時は片山の耐火構造と神道式の木造建築の二つが同時に存在していた事になる。

最終的に外宮前に徴古館を建設することを諦め、再び倉田山に建設することが、同 33 年 11 月に決定する。その後同 39 年 6 月に徴古館建設地に縄張りを行い建設がスタートし、同時に地形工事を行った。同 42 年に竣工した。

所蔵図面より、木造徴古館から数え、組積造の徴古館も 3 回設計変更されたとわかる。

なお、神宮徴古館では室は全て側窓採光となっており、中央講堂のみ高窓採光である。また竣工した後に陳列配置計画を行っていることから片山が計画するに際して細かい配置が決まっていなかったと思われる。また絵画室も古文書などを中心とする展示物であった。

徴古館より以前に竣工した帝国奈良博物館（明治 27 年）や京都博物館（同）では絵画展示室ですでに天窓を設けているが、徴古館では側窓しかなかったことで、書画に日光が当たらないように家具配置により工夫することになった。所蔵資料のうち「神宮徴古館陳列棚配置図」で見ることができる。

(3) 神宮徴古館・農業館以外の神苑会の業績

代表的なものに御幸道路、および鉄道の敷設がある。

御幸道路は明治 36 年に第五回内国勸業博覧会が大阪で開催され、大阪からの旅客流入と後に建設される神宮徴古館の通行に充てる目的を以て岩淵町～倉田山～久世戸町を通る道路（現県道 37 号線の一部）を建設する計画が起こる。

同年 7 月には工事がほぼ完成し、今の道路の基礎が出来上がった。同 40 年にこの道路を改修する計画が浮上し、それと同時に外宮前神苑地の一部を新設道路の敷地として三重県に寄付し、同 43 年に現在の道路が完成する。

鉄道は参宮鉄道と伊勢電気鉄道である。参宮鉄道（現 JR 東海参宮線）は明治 22 年、神苑会会頭吉井友実の勧誘に基づき、太田小三郎が設立を図った。同 21 年に三重郡菟野村の小河義郎等、14 名が設立を發起するものの、殖産興業上無意味であることから鉄道局長は却下する。しかし、翌年に神苑会評議員の渋沢栄一等を加えて再び発起したところ認可が下りた。主として伊勢の旅客交通を目的として同 26 年 12 月に津～宮川間が開業、同 30 年に山田駅（現伊勢市駅）まで延伸し、同 44 年に全線開通する。宇仁田馨・渡邊洪基・太田小三郎等、神苑会に関係のある人物が社長・取締役を務め、同 40 年に国有化される。

伊勢電気鉄道は宇治山田の市内電灯の供給を目的として設立された「宮川電気(明治30年)」が余剰電力を活用する為に「伊勢電気鉄道(明治36年)」と名称を変更して山田―二見間の電気鉄道が竣工した路面電車である。設立者は太田小三郎等の神苑会の人物が設立し、昭和36年に廃止となる。

神苑会は明治40年の御幸道路改修と併せて、外宮前神苑地の一部を伊勢電気鉄道に売却し、外宮前駐車場の建設場所として計画を始める。神宮徴古館所蔵史料内に外宮前駐車場の図面も確認できた。

(4) 神苑会に関与した人物と東熊との関係。片山家史料に登場する人間関係との照合。

片山家史料では図1に示した神苑会証賞が他の辞令とともに現存する。また徴古館の竣工絵はがきが史料中に存在している。

特定人物との関係が明確な史料は探し出せなかったが、以上の史料の存在を確認できる。



図3 片山家史料にある徴古館絵葉書

(下が宛名面)

上の写真は「徴古館全景」と題され、下に「明治四十二年九月二十九日神苑會徴古館開館式記念 神苑會發行」とある。下は同じ葉書の宛名面で「東京府下 千駄ヶ谷町穂田 片山鑑様 東」とある。東熊から妻鑑子(てるこ)に宛てたと分かるが、切手・消印が無く、手渡ししたものであろう。

前述した徴古館の竣工全景を知ることができる。

以上 (1) ~ (4) を本研究の結論とする。

〈引用文献〉

磯俣祐介・原正彦・渡辺(伊藤)洋子「神宮徴古館・農業館に関する一考察」日本建築学会計画系論文集 第78巻 第691号, 2031-2037, 2013年9月

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線 伊藤洋子は渡辺洋子で学会発表)

〔学会発表〕(計1件)

川原聡史・渡辺洋子「明治・大正期の在北京日本公使館の建築―眞水英夫設計四代目北京公使館を中心として―」日本建築学会関東支部研究報告集Ⅱ pp. 609-612 2015.3

〔図書〕(計9件)

- ① 川原聡史「明治・大正期における在北京日本大使館の建築 - 眞水英夫設計四代目建築群を中心として -」芝浦工業大学大学院修士論文 2015.3
日本建築学会優秀修士論文賞受賞
- ② 内山史崇「神宮徴古館の軌跡 ～博物館建築としての徴古館～」芝浦工業大学卒業論文 2016.3
- ③ 「神宮司廳 神宮徴古館・農業館所蔵資料 1 共通」
- ④ 「神宮司廳 神宮徴古館・農業館所蔵資料 2 神宮徴古館 1」
- ⑤ 「神宮司廳 神宮徴古館・農業館所蔵資料 3 神宮徴古館 2」
- ⑥ 「神宮司廳 神宮徴古館・農業館所蔵資料 4 神宮徴古館 3」
- ⑦ 「神宮司廳 神宮徴古館・農業館所蔵資料 5 神宮徴古館 4」
- ⑧ 「神宮司廳 神宮徴古館・農業館所蔵資料 6 神宮農業館」
- ⑨ 「神宮司廳 神宮徴古館・農業館所蔵資料 7 その他」

上記③～⑧ 芝浦工業大学 工学部建築工学科 伊藤洋子研究室 私家版 2018.3

〔産業財産権〕○出願状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

伊藤洋子研究室ウェブサイト

<https://www.kk.shibaura-it.ac.jp/professors/ito-lab>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤(渡辺)洋子 (ITO-WATANABE, Yoko)
芝浦工業大学・建築学部・教授
研究者番号: 40327755

(2) 研究協力者

原正彦 (HARA, Masahiko)